〔博士論文概要〕

パッションの二元モデルに関する
臨床心理学的研究

令和元年度

久　保　尊　洋

筑波大学大学院人間総合科学研究科

ヒューマン・ケア科学専攻

目的　パッションは,特定の活動等に対して向けられる強い意向(strong inclination）と定義されている。パッションは，特定の好きな活動に価値を見出し，多くの時間やエネルギーを費やした結果，その活動がアイデンティティに内在化されることで生じる。内在化とは，個人の外側にある価値または制御を自己に取り入れる過程であるが，パッションの主たる理論であるパッションの二元モデル（Vallerand et al., 2003; Vallerand, 2015）によれば，この内在化の程度によって，パッションは調和性パッション(harmonious passion)と強迫性パッション(obsessive passion）の 2 つに分けられると考えられている。このうち，調和性パッションは，特定の活動への欲求を統制することができ，その活動への持続的な取り組みを可能にする。また，特定の活動への欲求を統制することができるわけであるから，ほかの活動や生活の一部とも調和し，心理的適応を促す。一方，強迫性パッションは，特定の活動への欲求を統制することができず，その活動への頑固な執着を生じさせる。また，特定の活動への欲求を統制できないわけであるから，ほかの活動や生活の一部との葛藤を引き起こし，心理的不適応を促す。

本研究では，上述のパッションの二元モデルに基づく研究を行っていく。これまで，同モデルに基づくパッションを測定する尺度の開発と翻訳版の作成が海外を中心に行われ，パッションが心理的適応と不適応に与える影響や，2 つのパッションの促進・抑制要因に関する検討がなされてきた。しかし,その中でいくつか検討すべき問題があった。以下に，その問題の詳細と 3 つの目的を示した。

第 1 の目的は，パッションの二元モデルに基づく尺度の開発を行い，その信頼性と妥当性を示すことである。我が国では，パッションに関する研究はほとんど行われていなかった。その理由として，パッションの

概念が明確に捉えられていなかったことに加えて，パッションを量的に測定する実用可能な心理尺度が存在しなかったことが挙げられる。そこで，二元モデルに基づくパッションを量的に測定する実用可能な心理尺度を作成し，パッションの二元モデルにおいて想定される概念との関連について検討する必要がある。

第 2 の目的は，パッションが心理的適応と不適応を与える影響についてより詳細に検討することである。先行研究においても，調和性パッションが心理的適応を促し，強迫性パッションが心理的不適応を促すことが実証的にも示されてきた。しかし，先行研究を概観する中で，パッションと依存との問題，継時的変化の問題，well-being の指標の問題が浮上した。これらの問題を解決していくことで，パッションが心理的適応と不適応に与える影響をより明確にすることができると考えられる。

第 3 の目的は，パッションの概念を取り入れ，心理的援助を行うための基礎的な研究を行うことである。パッションに対する心理的援助を行うために，調和性パッションと強迫性パッションの促進と抑制に関わる研究が必要となっている。先行研究から，パッションを向ける活動で生じる認知への介入によってパッションを変容できる可能性や，基本的心理欲求がパッションの促進と抑制に影響している可能性が指摘されている。そこで本研究では，認知に着目したアプローチと，基本的心理欲求に着目したアプローチの，2 つの視点から研究を行う。

以上の 3 つの目的に沿って，本研究では 5 つの実証的研究を行った。これらの研究を実施し，パッションの二元モデルに関する新たな知見を提供することを目指した。

対象と方法　大学生を対象とした質問紙調査を 5 つの研究で行った。研究 1 では，二元モデルに基づくパッションを量的に測定する実用可能

な心理尺度を作成し，信頼性と妥当性について検討した。Passion Scale（Marsh et al., 2013）をバックトランスレーションの手続きで邦訳し，調和性パッションの 6 項目，強迫性パッションの 6 項目，パッション基準の 5 項目の計 17 項目からなるパッション尺度日本語版を作成した。調査 1 では,まず,パッションを持っている人を分析対象者とするために，パッション基準（5 項目 7 件法）の合計得点を算出し，平均 4 以下の値のサンプルは除外した 508 名を分析対象者とした。この手続きは以降の調査でも同様に行った。質問紙の内容は，パッション尺度日本語版の基準関連妥当性を検討するためのものであった。調査 2 では，再検査信頼性について検討するために，3 週間間隔で 2 時点調査を行った。分析対象者は 63 名であった。研究 2 では,パッションと依存の問題を取り上げ，スマートフォンに対するパッションが依存と精神的健康，不眠傾向に与える影響について検討を行った。分析対象者は 120 名であった。研究 3 では，パッションが心理的適応と不適応に与える影響を 3 時点の交差遅延モデルによる検討を行った。心理的適応と不適応の指標として，人生満足度，不安，本来感，心理的 well-being を用いた。分析対象者は 137 名であった。研究 4 では，パッションが自動思考を介して抑うつと人生満足度に影響を与えるか検討を行った。分析対象者は 241 名であった。研究 5 では，調和性パッションを促進し，強迫性パッションを抑制するために，基本的心理欲求について，活動内外の欲求充足と欲求不満に着目して検討を行った。分析対象者は 254 名であった。

結果　研究 1 では，パッション尺度日本語版について探索的因子分析によって 2 因子構造が認められ，確認的因子分析の結果，構造的側面の妥当性が確認された。さらに，パッションの二元モデルから関連が想定される概念について，ほぼ予想通りの関連が認められ，パッション尺度

日本語版の基準関連妥当性が確認された。また，内的整合性と調査 2 における再検査信頼性の値から，尺度の信頼性についても確認された。研究 2 では，調和性パッションはスマートフォン依存の一部の変数と不眠傾向に負の影響，精神的健康に正の影響を与え，強迫性パッションはスマートフォン依存と不眠傾向に正の影響，精神的健康に負の影響を与えることが明らかになった。研究 3 では，調和性パッションは不安を抑制し，人生満足度を高めていた。しかし，この調和性パッションからの影響は Time1 から Time2 の間にのみ認められ，Time2 と Time3 の間には認められなかった。また，強迫性パッションからの影響は認められなかった。研究 4 では，調和性パッションは肯定的自動思考を媒介して，抑うつと人生満足度に影響を与え，強迫性パッションは否定的自動思考を媒介して，抑うつに影響を与えていた。研究 5 では，活動内と活動外でともに基本的心理欲求が充足されることで調和性パッションが促進され，活動外で欲求充足がされず，活動内で欲求充足と欲求不満をもつことで強迫性パッションが促進されることが明らかになった。

考察　パッション尺度日本語版が信頼性と妥当性を備えた尺度であることが示され，調和性パッションが心理的適応を促し，強迫性パッションが心理的不適応を促すものであることが一連の研究から明らかになった。また，調和性パッションの影響について，その心理的適応への影響は一過性のものではなく長期間継続するものであり，その過程には，活動において生じる肯定的自動思考を多く経験していることが，一要因となっている可能性が示された。また，強迫性パッションについては，依存という不適応的な活動への従事を促すことが明らかになった。強迫性パッションは，依存の対象となる活動がどのようなものであっても，依存の危険性を予測することができる有用な指標ともなりうる。また，

先行研究で指摘されていなかったが，調和性パッションが依存を抑制することも明らかになっており，依存の問題に対する予防因子として，調和性パッションが機能する可能性がある。

心理的援助を行う際には調和性パッションを促進し，強迫性パッションを抑制する必要があるが，そのためには認知と基本的心理欲求に着目したアプローチが有効である可能性が示された。例えば，活動における否定的な自動思考に対する心理的援助や,活動内外の欲求不満を解消し，欲求充足を促すための心理的援助の方法についていくつかの援助方法が提案された。

結論　本研究は，パッションに関する概念的検討から，3 つの目的を設定し，5 つの研究を行った。これにより，未検討であったパッションの機能の詳細が明らかになり，心理的適応を促す調和性パッションを促進し，心理的不適応を促す強迫性パッションを抑制するための新たな知見が提供された。こうした知見は，臨床心理学においても重要なものであると考える。